

当院における Meropenem 大量投与の現状と有効性・安全性に関する検討

¹北里大学大学院 医療系研究科、²北里大学病院 感染管理室、³北里大学病院 薬剤部、⁴北里大学 医学部 救命救急医学、⁵北里大学 医学部 輸血細胞移植学、⁶北里大学病院 臨床検査部、⁷北里生命科学研究所 抗感染症薬研究センター、⁸北里大学感染制御研究機構

○中村 正樹^{1,2}、高山 陽子²、近藤 留美子³、佐藤 千恵⁴、鈴木 裕子⁵、平田 泰良²、二本柳 伸⁶、花木 秀明⁷、砂川 慶介⁸

【背景・目的】Meropenem (MEPM) はカルバペネム系の抗菌薬で重症・難治性感染症を中心に使用されている。日本国内における承認用量は最大 3g までであり、これは諸外国よりも少ない。諸外国においては化膿性髄膜炎および嚢胞性腺維症に対しては 1 日 6g の投与が承認されており、日本国内においても化膿性髄膜炎の診療ガイドラインには MEPM の 1 日 6g 投与が推奨されている。しかし、実際、MEPM の 1 日 6g 投与を行っている施設は多くないのが現状である。そこで今回、当院において MEPM を 1 日 6g 投与を行った症例を後向きに調査し、患者背景、有効性、安全性に関する検討を行った。対象は北里大学病院において 2009 年～2010 年に MEPM の 1 日 6g 投与を受けた全症例とし、患者背景、適応症、高用量の理由、全治療抗菌薬の有無、各臨床検査値および副作用の有無等を診療録より調査した。

【結果・考察】対象症例は 42 症例（男性 19 例、女性 23 例）で、平均年齢は 48.6 ± 19.9 歳（平均 \pm SD）であった。使用された疾患で最も多かった診断は髄膜炎で、高用量使用の理由として最も多かったのは「感染巣への薬剤移行性を考慮したため」であった。投与期間は平均 13.4 ± 11.7 日であり、de-escalation した 12 症例を除くと平均 16.9 ± 11.9 日であった。治療の有効性の判定が可能であった症例は 31 例で、有効が 19 例、部分的に有効が 11 例であった。副作用の検討では、肝機能障害を 6 例、腎機能障害を 1 例、薬疹を 1 例に認めたが、いずれも軽度であった。また、痙攣などの中枢神経系への副作用は認められなかった。今回の調査では MEPM の 1 日 6g 投与は化膿性髄膜炎に対して最多であり、化膿性髄膜炎の治療においては、諸外国と同様に 1 日 6g 投与の必要性が求められていると考えられる。その他の重症・難治性感染症においても MEPM 大量投与の有効性が期待されており、今後、更なる有効性と安全性に関する検討が必要であると考えられる。

新剤形医薬品アジスロマイシン注射剤の使用実態調査

¹横浜市立市民病院 薬剤部

○五十嵐 文¹、佐藤 歩¹、五十嵐 俊¹、高尾 良洋¹

【背景】アジスロマイシン(AZM)は 15 員環マクロライド系抗生物質であり、医療・介護関連肺炎診療ガイドライン等で第 1 選択薬として推奨されている。AZM は、速やかな組織移行性と長時間高濃度に感染部位へ集積する特徴を有する。昨年 7 月に承認された新剤形医薬品である AZM 注射剤は、1 日 1 回の投与で細菌性及び非定型肺炎の起炎菌に対して優れた抗菌活性を示す事が報告されている。また、最新の人口動態統計で、肺炎は死因の 3 位となった。経口投与が困難な場合がある肺炎患者において、新剤形である AZM 注射剤の使用実態を調査する事は適切な薬物投与設計の立案に有用であると考えられる。

【方法】2012 年 1 月から 3 月までに AZM 注射剤が投与された 8 症例を retrospective に調査した。

【結果】AZM 注射剤が投与された 8 症例において投与開始時の診断病名(例数)は、肺 MAC 症・薬剤性好中球減少症(1)、不明熱(1)、細気管支閉塞を伴う気質化肺炎・異型肺炎(1)、細菌性肺炎・異型肺炎(2)、細菌性肺炎(1)、異型肺炎(1)、異型肺炎を含めた下気道感染(1)であった。平均投与期間は 3.3 日、平均入院期間は 15.1 日であった。全症例で他の抗菌薬を併用し、AZM 注射剤投与後に AZM 経口剤への切替え(4)やステロイドなどの他の治療薬への切替え(4)をしていた。治癒率は 100%であった。AZM の影響が否定出来ない有害事象である下痢は 4 例認められた。

【考察】肺炎治療において、初期の薬剤選択は重要である。本調査では対象患者の AZM 注射剤の投与期間は、入院期間と比較して短い傾向が認められた。これは、AZM 経口剤への切り替えや診断が確定されたことで他の治療への変更が行われたことが要因の一つであると考えられる。有害事象として下痢が半数の患者で認められた。しかし AZM の投与前から下痢症状を有する症例も含まれている為、本調査では正確な頻度を算出することができなかった。今後さらに症例数を増やし、同様の検討を継続する予定である。